

# 技術・家庭科における 共生能力を育成する学習指導の研究

- 家庭分野「家族と家庭生活」の体験的な活動をとおして -  
(第1報)

科学産業教育室 千葉 淳子

研究協力校  
花巻市立西南中学校

## 研究の概要

この研究は、技術・家庭科の家庭分野「家族と家庭生活」の体験的な活動をとおして、共生能力を育成する指導方法を明らかにし、技術・家庭科における学習指導の改善に役立てようとするものである。

本年度は、2年次研究の初年度として、県内の公立中学校の家庭科担当教員を対象に指導の実態について調査を行った。その結果、生徒のプライバシーへの配慮等から家族や家庭について興味・関心をもたせ、持続させることの指導に困難を感じていることが明らかになった。

これらの課題の解決に向けて、共生能力を育成するための指導方法の基本的な考え方をまとめることができた。

キーワード：家庭分野「家族と家庭生活」 共生能力 体験的な活動

## 研究目的

技術・家庭科の家庭分野「家族と家庭生活」において、家族や周囲の人々との人間関係の大切さや家庭生活を営む意義を見だし、家族関係をよりよくするための具体的な方法を考えさせ、家庭生活における実践に結びつけることが求められています。

しかし、現状をみると、社会の人間関係の希薄化や家庭の機能の低下により、自分の生命の大切さ、家族や周囲の人々との人間関係の大切さ、家庭生活の意義などを実感できない生徒が多くなったように思われます。また、これまで、幼児の成長過程を学習することにより自分の成長を振り返らせることはしましたが、家族関係をよりよくするための実践に結びつける指導は少なかったように思われます。

このような現状を改善していくためには、自分の生命の大切さに気付かせ、家族や周囲の人々との人間関係へと関心を高め、よりよい家族関係のために自分ができることを考えさせ、家庭における実践に結びつける必要があります。

そこで、本研究では、家庭分野「家族と家庭生活」における体験的な活動をとおして、共生能力を育成する指導方法を明らかにし、技術・家庭科における学習指導の改善に役立てようとするものです。

## 研究の内容

この研究は平成14年から平成15年にわたる2年次研究の1年目です。今年度の研究内容は次のとおりです。

- 「家族と家庭生活」の指導にかかわる実態調査の実施及び調査結果の分析と考察
- 「家族と家庭生活」の内容と小学校・高等学校家庭科との関連について
- 「家族と家庭生活」の学習指導の工夫についての基本構想の立案
- 「家族と家庭生活」の指導試案、指導計画、評価計画の作成

## 研究結果の分析と考察

### 1 「家族と家庭生活」の指導にかかわる実態調査結果の分析と考察

#### (1) 実態調査の目的

この調査は、県内の公立中学校の家庭科担当教員を対象に「家族と家庭生活」の指導の実態と課題を明らかにして、指導試案作成のための資料を得ることを目的に実施しました。

#### ア 実態調査の対象

県内公立中学校208校の家庭科担当教員（免許外担当教員、講師、非常勤講師含む）

イ 実態調査実施期間 平成14年7月2日から8月19日

ウ 回収率 208校中189校（90.9%）

#### エ 実態調査の内容と調査仮説

#### (ア) 幼稚園や保育所等の訪問の実施の有無について

幼稚園や保育所等への訪問は幼児を実感するために効果があると考えられているが、実際に実施している学校はどのくらいあるのだろうか。また、大規模校ほど学級数が多いため何度も訪問することになり実施が難しいのではないか。

#### (イ) 「家族と家庭生活」の学習を進めるための効果的な方法について（複数回答）

体験的な学習方法として、従来から考えられているロールプレイングの他に最近では心理劇やカウンセリングの手法などが取り入れられてきているが、まだ検討中の段階であまり実施されておらず旧学習指導要領の「保育」と同様の手法を取り入れている学校が多いのではないかと。

(り) 「家族と家庭生活」の指導上困難と思われる点、課題について(記述式回答)

複雑な家庭環境を抱える生徒がいた場合、その生徒への配慮に対して困難を感じているのではないかと。

## (2) 実態調査の結果の分析と考察

### ア 幼稚園や保育所等の訪問の有無について

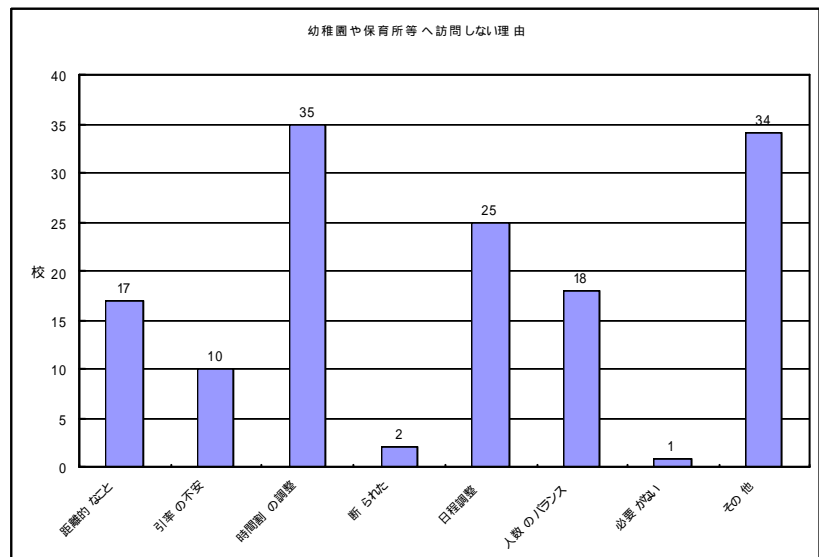
幼稚園や保育所等の訪問については、旧学習指導要領「保育」、現行の「家族と家庭生活」においても必修ではありませんが、訪問した際の効果についてはこれまで多くの発表があり、その効果は主に次のとおりです。

- ・ 幼児への関心が高まり、幼児理解が深まる。
- ・ 親や保育士の苦勞について理解できるようになる。
- ・ 幼児をとおして、自分の成長を振り返り考えることができる。
- ・ 子ども時代に乳幼児と触れあう機会の多かった者は子ども好きになる傾向がある。
- ・ 生徒が生き生きと活動している。 等

実態調査の結果、家庭科の時間に幼稚園や保育所等の訪問を実施している学校は、189校中105校(55.6%)でした。実施していない学校を学校規模で見ると、54校中34校(63.0%)が6学級以下の小規模校でした。18学級以上の規模の学校で回答のあった9校中6校が訪問を実施していることから、学級数の多い学校ほど実施できにくいと考えていましたが、そうではないことが明らかになりました。

### イ 幼稚園や保育所等へ訪問しない理由 (複数回答)

幼稚園や保育所等へ訪問しない理由は、学校規模とは、あまり関係がないことが明らかになりました。その理由は、右の【図1】のとおり学校内における時間割の調整、受け入れ側である幼稚園や保育所等との日程調整が難しいことが上位にあげられています。次いで、保育園児(幼稚園児)の数に対して、中学生が多すぎることで、幼稚園や保育所等が近所にないため家庭科の時間で往復することが難しいという距離的な理由でした。



【図1】 幼稚園や保育所等へ訪問しない理由 n=84 単位(校)複数回答

その他を選択した34校の理由のなかに、「総合的な学習の時間や職場体験学習で行っている」と回答した学校は23校あり、家庭科の授業として訪問したいが同一施設に何度もお願いすることに対する遠慮が感じられる回答がありました。その他は、「実施したいが計画はまだである」4校、「免許外担当、

非常勤講師等のため難しい」4校、「複式学級のため今年度は実施しない」2校、「小中併設校で普段から小学生と触れ合っている」1校、「授業形態の関係で時間確保が難しい」1校、「無理に行って交流するより近所の幼児とどのように接するか、どう遊んだかを課題にしている」1校、「生徒の実態から幼稚園や保育所等に迷惑をかけるのではないかと思うと実施ができない」1校でした。

ウ 「家族と家庭生活」の学習をすすめるにあたっての効果的な方法について

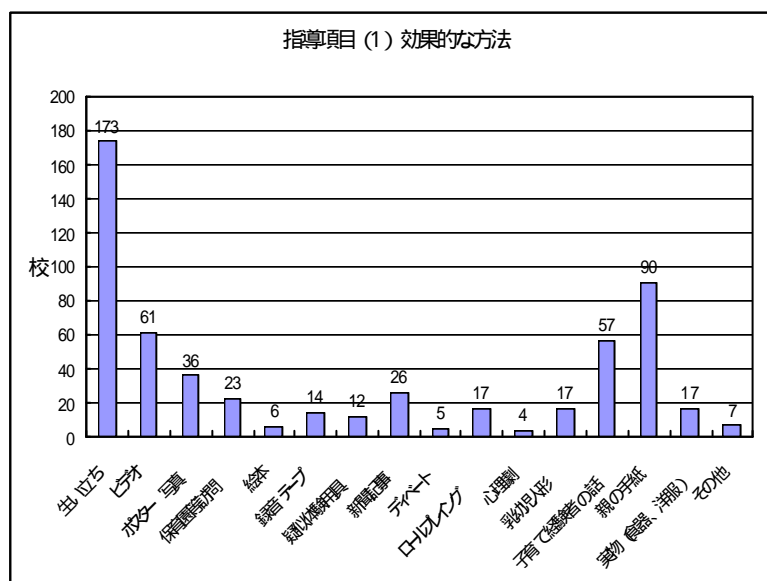
学習指導要領B「家族と家庭生活」の指導項目(1)から(3)について効果があると思う指導方法を下の選択肢の中から選択してもらいました。(複数回答)

A 自分の生き立ちをまとめる	B ビデオ	C ポスター、写真
D 幼稚園や保育所等訪問	E 絵本	F 録音テープ
G 疑似体験用具	H 新聞記事	I ディベート
J ロールプレイング	K 心理劇	L 乳幼児人形
M 子育て経験者の話	N 親の手紙	O 実物(幼児用食器、洋服)
P その他( )		

(ア) 指導項目(1)について

指導項目(1) 自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えさせる。

右の【図2】のとおり、自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えさせる活動には、自分の生き立ちを家族に聞いたりまとめたりすることが効果があるとする回答が173校(91.5%)でした。しかし、時間がかかりすぎること、小学校「生活科」や、総合的な学習の時間でも行っている生徒が、またかと思われないような工夫、家族に聞くことができない生徒への配慮等が、難しいとする回答がありました。その他は、「母子健康手帳」3校、「乳幼児の写真」2校、「アマラとカマラ(オオカミに育てられた子)」1校、「思い出を語る」1校、「家族からの手紙」1校でした。



【図2】指導項目(1)において効果的な方法 n=189 単位(校)複数回答

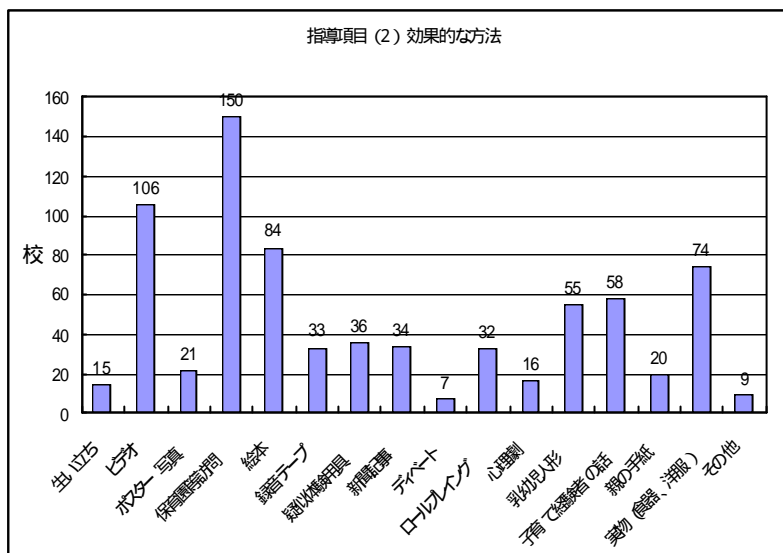
(イ) 指導項目(2)について

指導項目(2) 幼児の発達と家族について、次の事項を指導する。

- ア 幼児の観察や遊び道具の製作を通して、幼児の遊びの意義について考えること。
- イ 幼児の心身の発達の特徴を知り、子どもが育つ環境としての家族の役割について考えること。

次頁の【図3】のとおり、幼児を理解させるために、実際に幼稚園や保育所等へ訪問することが効

果的であるとする回答は、150校（79.4%）、ビデオ利用が106校（56.1%）でした。79.4%の学校が、幼稚園や保育所等の訪問を効果があるとしながらも、前述の「訪問の有無について」の調査結果からもわかるように、その実施率は55.6%しかないということに家庭科担当教員の悩みがあるといえます。また、実際に訪問を行っている中学校のなかには、幼稚園の園児が少なく、中学生が大勢で押しかけるようで少々気が引けるとの記述があり、少子化とい



【図3】指導項目(2)において効果的な方法 n=189 単位(校) 複数回答

う社会の変化の影響を受けている一面といえます。

指導項目(2)は旧学習指導要領「保育」領域の内容なので、効果があると考えられている方法は、「保育」領域で用いられていた方法が多くあげられました。その他の記述も、遊び道具の製作がほとんどでした。学習指導要領では、遊び道具の製作が目的ではなく、遊び道具の製作をとおして幼児にとっての遊びのもつ意義について考えさせることや幼児についての理解を深めることをねらいにしていますが、今回の実態調査から作品作りが主になっている実態がうかがわれました。心理劇については、効果的としながらも学級の雰囲気の違いがそのまま効果の差になることや、教師の適切なアドバイス、効果を上げるための訓練の必要性などから実践に踏み込めないという回答がありました。その他は、「遊び道具の製作」7校、「赤ちゃんとの触れ合い体験」1校、「遊び道具の実物」1校、「家族での話し合い」1校でした。

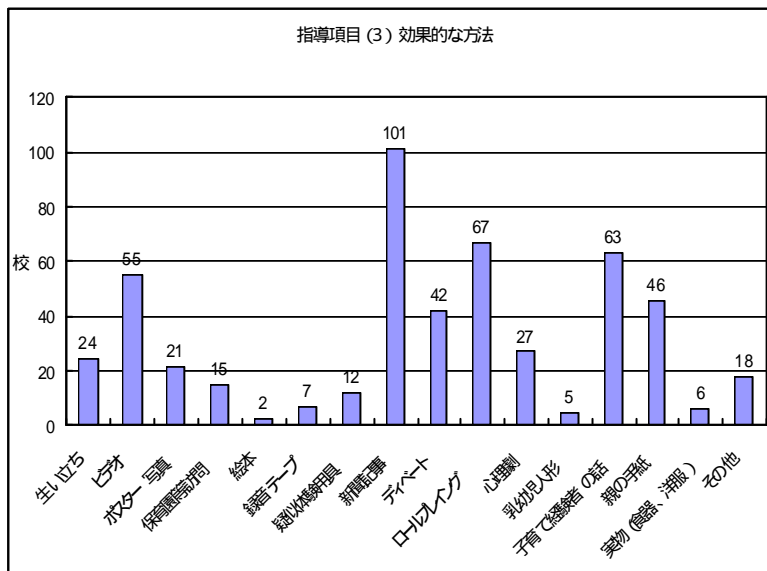
(ウ) 指導項目(3)について

指導項目(3) 家庭と家族関係について、次の事項を指導する。

ア 家庭や家族の基本的な機能を知り、家族関係をよりよくする方法を考えること。

イ 家庭生活は地域の人々に支えられていることを知ること。

家族を考える学習は、生徒の家族の形態、生活スタイルが様々であるため、新聞記事の活用やTV番組の家族をモデルにして学習を進めるのが効果的であると考えられています。



【図4】指導項目(3)において効果的な方法 n=189 単位(校) 複数回答

今回の調査においても上の【図4】のとおり新聞記事が101校（53.4%）、ロールプレイングが67校（35.4%）と高い割合です。子育て経験者の話や親の手紙も高い割合を示しています。その他は、「地域活動への参加」7校、「調べ学習」6校、「近所の人に話を聞く」

2校、「ホームプロジェクト」1校、「アニメやドラマに出てくる家族」1校、「衣食住の体験」1校でした。

### エ 「家族と家庭生活」の指導上困難と思われる点、課題について

指導項目(1)から(3)それぞれに記述式で回答してもらいました。重複した内容がかなりあったので、記述の内容ごとに分類して下の【表1】にまとめました。

【表1】指導上困難と思われる点、課題点 n=189 単位(校) 複数回答

内容の分類	指導項目(1)	指導項目(2)	指導項目(3)
実践に結びつける指導の工夫	0	2	12
生徒に興味・関心をもたせるための教材や工夫	29	62	57
教師自身が確固たる指導の見解を持ち得ていない	2	3	17
教師の偏った考えに陥らないようにすること	1	1	3
プライバシーへの配慮	118	12	32
時間が不足で学習を深められない	3	46	6
評価のしかた	0	5	1
教師の知識・体験・理解不足	1	4	4

具体的な記述内容は次のようになります。

#### 実践に結びつける指導の工夫

- ・少子化や幼稚園や保育所等の訪問が困難という理由から、なかなか幼児とふれあう機会が無く実生活と結びつけにくいところがあるのが現状。

#### 生徒に興味・関心をもたせるための教材や工夫

- ・地域行事に参加したり、地域や家族と会話をすることが少なくなっているため自分は支えられて生活しているという実感をもてない生徒に気付かせる指導が難しい。

#### 教師自身が確固たる指導の見解を持ち得ていない

- ・生徒や生徒の家庭の価値観や考え方も様々であり、人とのかわりについて、どのように教えるべきか迷うことが多い。

#### プライバシーへの配慮

- ・家庭に問題を抱えている生徒も少なくない。望ましくない育てられ方をしてきた生徒もいる。それらの生徒に苦痛を与えるかと思うと難しい。

このような記述から、家庭生活を意識しないまま日常生活を過ごしている生徒へ「家族と家庭生活」の学習内容へ興味・関心をもたせること、また、興味・関心を持続させる授業展開の工夫、社会の変化、プライバシーへの配慮や家族の形態の多様さにどのように対応してよいのか、はっきりさせられずに指導に困難を感じていることがうかがわれます。教師の戸惑いと生徒への配慮という課題を解決することが必要だと考えられます。

そのために、教師が答えを用意するのではなく、生徒自身が家族や家庭って何だろうと自分で自分の答えを探す活動を行うことで解決できると考えました。生徒自身が自分では意識していなかった家族や家庭の機能について探しながら気付くことで、解決できると考えます。

以上のことから、本研究において家族や家庭の機能について生徒自身が気付くことができ、興味・関心がもてる題材、教材・教具の工夫が必要と考えられます。

## 2 「家族と家庭生活」の内容と小学校・高等学校家庭科との関連

平成10年7月の教育課程審議会答申の家庭、技術・家庭科の改善の基本方針の一つに、「男女共同参画社会の推進、少子高齢化等への対応を考慮し、家庭の在り方や家族の人間関係、子育ての意義などの内容を一層充実する。」<sup>(1)</sup>とあります。男女共同参画社会の推進や少子高齢化等への対応については、特に高等学校家庭科において中心的に扱う課題であるとされていますが、中学生の時期に幼児への関心をもたせたり、子どもが育つ環境としての家族や家庭の重要性に気付かせたりする学習が重要であると指摘されました。

実際の指導において、中学校「家族と家庭生活」の内容と小学校・高等学校家庭科との関連をみると、小学校家庭科では、家庭生活への関心を高めることを重視し、中学校では、家族や家庭の機能の学習を重視しています。高等学校家庭科では、将来、家庭を築く者としての自覚をもたせる学習を充実させることを重視しています。

家庭、技術・家庭科の改善の内容を右の【図5】に示しました。

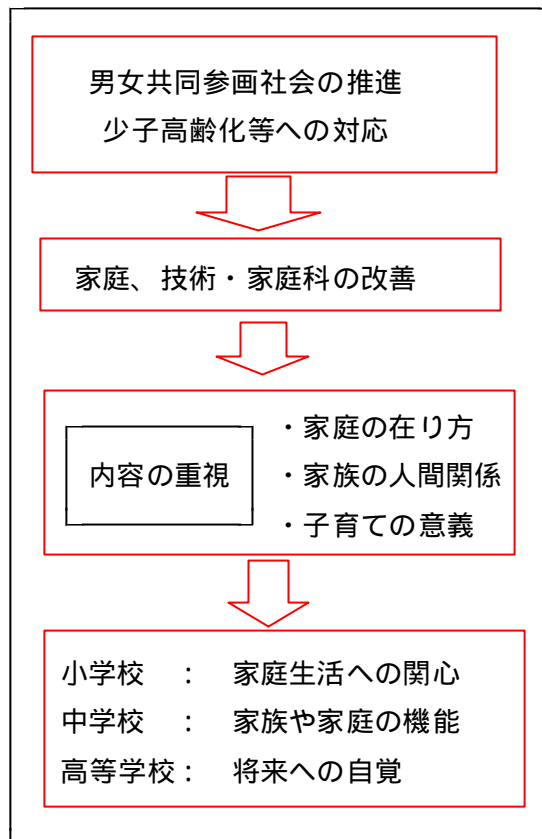
## 3 「家族と家庭生活」の学習指導の工夫についての基本構想

### (1) 家庭分野「家族と家庭生活」で育成したい能力

中学校技術・家庭科の家庭分野で育成したい能力を、中間(2002年)は、「家庭分野の内容は、『生活の自立と衣食住』『家族と家庭生活』から構成されている。前者では『自立』能力の育成が、後者では、『共生』能力の育成が期待されている。人間らしい生活とは、『人は、一人で立つことこそ本質である』という自立と『人は支え合うことこそ本質である』という共生の両面が統合されたところに成り立つといえる。自立とは、他の援助や支配を受けず、自分の力で身を立てることであり、生活的自立、経済的自立、社会的自立の側面があるが、家庭分野でその育成をめざしている自立能力とは、衣食住を中心とした生活的自立能力を中心とする。共生には人との共生と物との共生がある。家庭分野でその育成がめざされている共生能力とは、人との共生では、家族や幼児、高齢者など地域の人々との共生であり、物との共生では、環境や資源との共生である。」<sup>(2)</sup>としています。

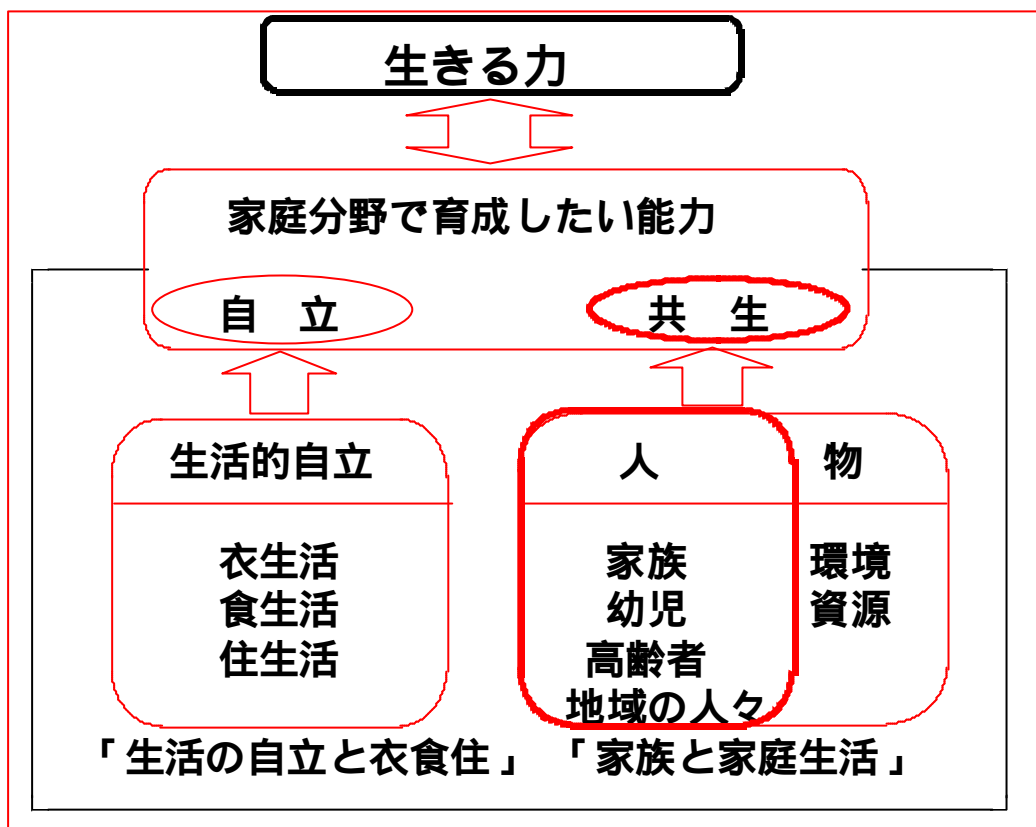
また、牧野(1999年)は、「子どもと家族についての学習を通して、自分自身と身近な人々をより深く理解できる豊かな心をはぐくむことが期待されるのである。」<sup>(3)</sup>としています。

このことから家庭分野「家族と家庭生活」では、人が生まれてはじめて共に生きていく相手である家族、また、将来の一番身近な存在となる家族について、共に支え合っていくためには何が大切であるのかを考えさせながら、人との共生能力を身につけさせることがねらいであると考えます。それは、地域の人々や社会の人々と、共に支え合って生きていくことについて考えを深めることにつながると考えます。



【図5】家庭、技術・家庭科の改善

次の【図6】は、中間の家庭分野で育成したい能力をまとめたものです。



【図6】家庭分野で育成したい能力

(2) 共生能力を育成することの意義

近年、家族構成員一人一人がもつ個別スケジュールの比重が高まり、親は仕事、子どもは塾で顔を合わせる時間の少ない家族、食事の時間に家族がそろわない子どもの孤食化が聞かれるようになりました。このような生活では、子どもは家族や周囲の人々と、共に生活しているのだという実感がもてず、ますます社会の人間関係の希薄化が進んでいくと思われまます。平成10年6月30日の中教審答申「新しい時代を拓く心を育てるために」- 次世代を育てる心を失う危機 - 第2章でも、「もう一度家庭を見直そう」とあり、「家族一人一人が一個の人格として存在することを認識し、互いに意識的にコミュニケーションを図り、心を伝え合う家族の在り方を模索していくべきときを迎えているのではないだろうか。相互に思いやりのある明るい円満な家庭をつくるというこれまでの自明とされてきたことを、家族同士の意識的なネットワークづくりを通して努力して実現するということが今日的で切実な課題となっている。」<sup>(4)</sup>とあります。

「家族と家庭生活」の学習をとおして、「家族一人一人が一個の人格として存在することを認識し」、人間関係の大切さや家庭生活を営む意義を見だし、家族関係をよりよくするための具体的な方法を考えさせ家庭生活における実践に結びつけることは、「今日的で切実な課題」に向き合うことであり「新しい時代を拓く心を育てるため」であると考えます。

(3) 共生能力を育成する学習活動の考え方

武藤(1998年)が、「現代の家族が多様化し家族の定義があいまいになり、現実に家族が解体しかかっている問題に気付き、それがなぜ起こってきたかを考え、その中で自分自身はどうありたいかを生徒自身が導き出してゆくようにし向けることが学習として要求されるのではないだろうか。」<sup>(5)</sup>と述



べているように、共生能力を育成するための学習活動では、知識の伝達という学習活動ではなく、将来に向けて今後の生活を考える契機になる学習活動を展開したいと考えます。父親は仕事、母親は専業主婦で家庭を支えるというような一つのモデル家族で学習を進めるのでは、「生徒自身がどうありたいのかを導き出してゆく」ことが十分にできないと考えます。

学習過程の手だての第一段階として、生徒の家庭環境は、一人一人異なるから、家族を一つの集団としてとらえるのではなく、かけがえのない一人一人が集まって家族を形成しているのとらえさせる学習活動を行います。

かけがえのない自分の生命を見つめ、自分の存在を肯定的に受けとめさせるために「実生活で体験しにくい体験や未知体験をする。」<sup>(6)</sup> 体験活動として親の立場になって、班員の名前の由来を考える、乳幼児人形を抱く、言葉の発達のテープを聞く、幼児の遊びの意義を実感するために幼児になっておにごっこをする、等の活動を行います。

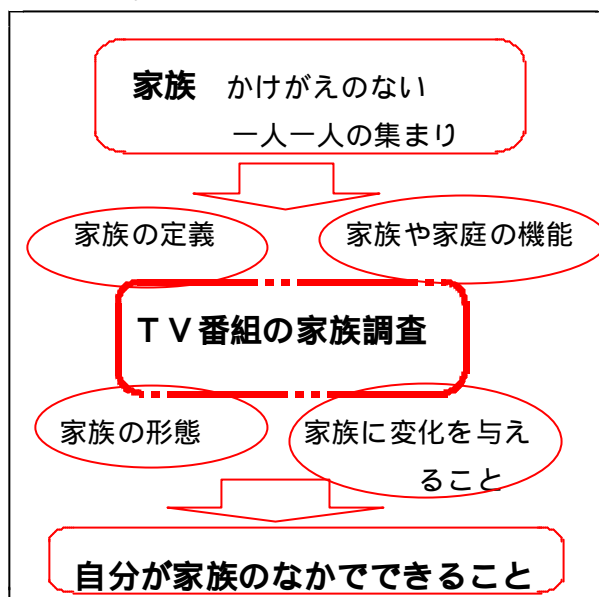
自己理解が深まり、自分の成長が家族や周りの人々に支えられていたのだと肯定的に受けとめられた後、第二段階として、家族を見つける活動の「日常の事象に立ち止まる体験をする」<sup>(7)</sup> 体験活動を行います。それが、【図7】に示すようにTV番組の家族の調査です。生徒が普段見ているTV番組のなかででてきた家族のなかから、生徒がいいなと思う家族をあげその理由を考えさせます。その理由から、家庭は家族の生活の場であり、衣食住や安全・保護などの基本的な要求を充足する場であることと、家族とのかかわりの中で心の安定や安らぎを得ていることについて理解させようと考えます。さらに、血縁的なつながりだけではなく、心理的なつながりも家族であることを考えさせます。生徒がよいと思う理由こそが生徒の求める家族像になります。そして、生徒が求める家族の中で家族と支え合って生きるために自分が家族のなかでできることを考えさせます。

ティーンガイド<sup>(8)</sup>を参考にすると、家族としてうまくやっていくための秘訣は「協力」「コミュニケーション」「信頼」「責任」「思いやりと尊重」「誠実」「気づかい」とあります。そして、「家族がうまくやっていくための魔法などは、ありません。誰もがたゆまぬ努力をすることです。話すこと、聞くこと、協力すること、信頼すること、気づかうことです。そうすればうまくいくのです。責任を分かち合い心配りと尊重を示せば家族はうまくやっていけるでしょう。」とあります。このうまくやっていく秘訣にTV番組の家族調査をとおして、生徒が気づき実践しようとする姿で共生能力が育成されたととらえます。実践させるための一つの手だてとして新聞記事を活用したいと考えます。

家族については、今現在の家族の中で居心地が悪い生徒への配慮を含めて、「個人を圧迫する家族ではなく個人の発達を助け合う家族という視点で家族を追求」<sup>(9)</sup>し、「家族は作り続けられるもの。作り続ける努力無くしては崩れるもの」<sup>(10)</sup>と、とらえて学習を展開します。

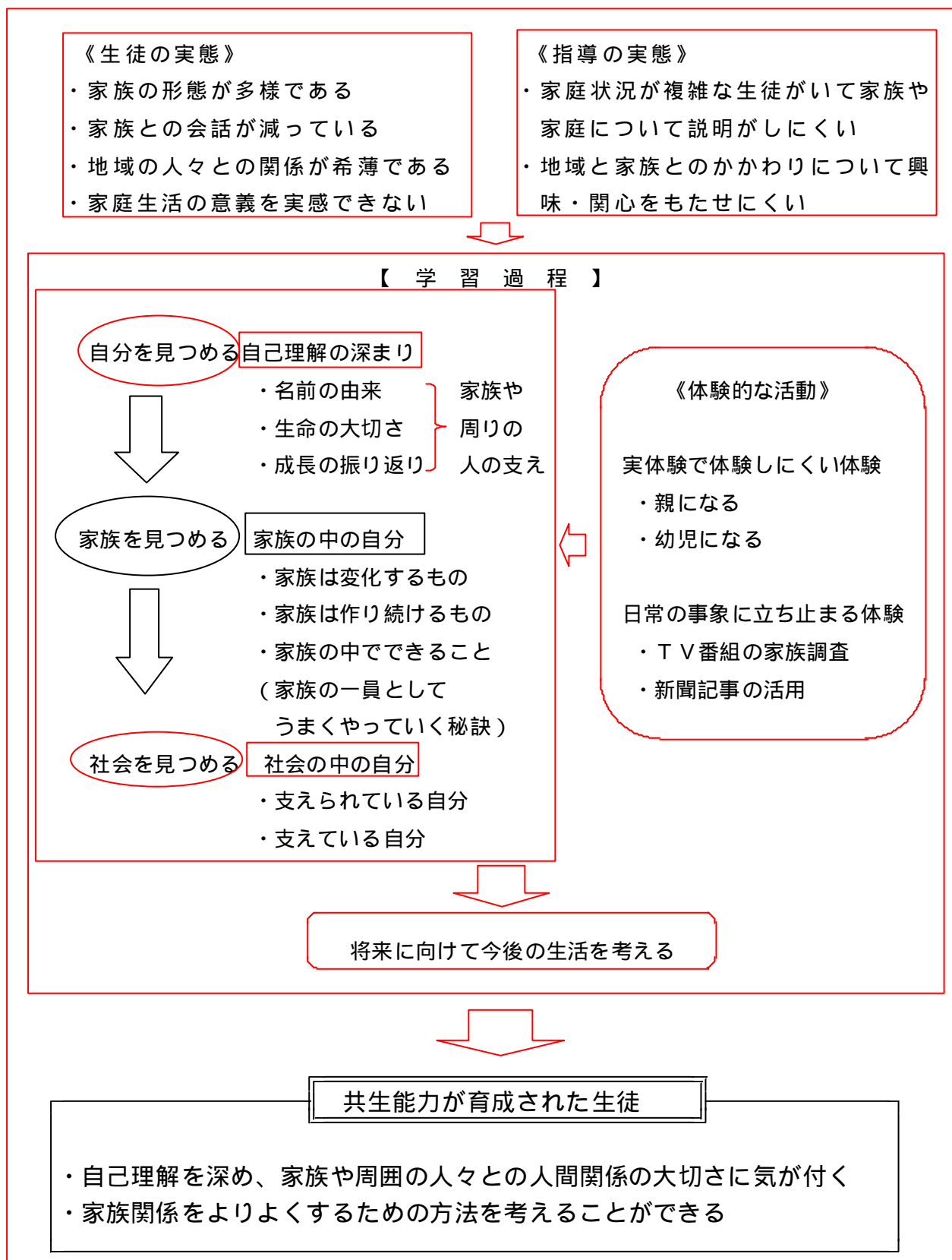
#### (4) 共生能力を育成するための体験的な学習活動についての基本構想図

基本構想をもとに、共生能力を育成するための体験的な学習活動について、次頁【図8】



【図7】家族を見つける学習の流れ

のように基本構想図を作成しました。



【図8】共生能力を育成するための体験的な学習活動についての基本構想図

## 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

(1)「家族と家庭生活」の指導にかかわる実態調査を実施し、家庭科担当教員の考えを広く聞くことができ、指導試案作成のための資料を得ることができました。

(2)小学校家庭、技術・家庭科、高等学校家庭の改善の基本方針についてと実践とのつながりを整理することができました。

(3)「家族と家庭生活」の指導にかかわる実態調査の結果から学習指導上の課題である教師の戸惑いと生徒への配慮を解決するための工夫についての基本構想を立案することができました。

(4)「家族と家庭生活」の指導試案及び指導計画、評価計画を作成することができました。(第46回岩手県教育研究発表会資料参照)

### 2 今後の課題

今年度作成した共生能力を育成するための体験的な学習活動についての基本構想に基づく指導試案を基にして、授業実践を行い、学習指導の改善のために検証する必要があります。

### 【引用文献】

- (1) 教育課程審議会、幼稚園・小学校・中学校・高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)、1998年
- (2) 中間美砂子、「K G Kジャーナル通巻349号」、2002年、P 4
- (3) 河野公子編著、「改訂中学校学習指導要領の展開 技術・家庭科 家庭分野」、明治図書、1999年 P 34
- (4) 中教審答申「新しい時代を拓くため」- 次世代を育てる心を失う危機 -、1998年
- (5) 武藤八重子、「家庭科教育再考」、家政教育社、1998年、P 75
- (6)(7) 吉本敏子、「家庭科教育第75巻9号」、家政教育社、2001年、P 19
- (8) 牧野カツコ監訳 ヴァレリー・チェンバレン著、「ティーンガイド - 人間と家族について 学ぶアメリカの家庭科教科書 -」、家政教育社、1992年、P 132 ~ P 137
- (9)(10) 朴木佳緒留、「現代家族学習論」、朝倉書店、1996年、P 163

### 【参考文献】

- 村田泰彦 他共著、「新共学家庭科の理論」、光生館、1986年
- 橋本都 編著、改訂小学校学習指導要領の展開 家庭科編、明治図書、1999年
- 河野公子編著、改訂高等学校学習指導要領の展開 家庭科編、明治図書、2000年
- 石塚千登勢、高等学校家庭科における保育への関心を高める指導展開の工夫に関する研究、平成12年度岩手県教育研究発表会資料、2001年
- 佐藤郷美、よりよい家族関係を創造する生徒の育成を目指した指導の一試み、平成13年度全理セ技・家部会 研究集録、2001年